

地域包括ケアネットワーク No.33

倉敷の在宅医療、医療介護連携への取り組み

倉敷医師会介護福祉部担当理事 手銭 高志

2年前、私が介護福祉部担当理事になってすぐにこの原稿依頼があった時には、まだ不慣れで活動内容を十分把握していないこともあって、これといった目玉のない報告になってしまったことを悔やみました。今回は、盛りだくさんの活動報告が出来ることをとてもうれしく思います。

まず、在宅医療に関しては、医師会長、副会長が中心になって、市と緊密に連携し、在宅医療システムを構築すべく、様々な分野の責任者が会議を重ねているところです。診診連携（主治医・副主治医制を含む）、往診専門診療所との連携、バックアップしてくれる病院との連携、訪問看護との連携等、まだまだ解決しないといけない問題は山積しています。しかし2年以内には生みの苦しみを乗り越えて、素晴らしい倉敷方式の在宅医療の形が出来上がるものと確信しています。

次に医療介護連携について、これは長年医師会として取り組んでいる課題ですが、まだまだ溝は埋まったとは言えません。今年4月に介護保険主治医意見書の予診票を作成し、倉敷市全体で運用を開始しました。まだ十分に広まったとは言えませんが、ケアマネが医療機関に直接届けることで、顔の見える関係を構築しつつあります。今後ケアマネが患者と同行受診することや、メール等を使った連携なども検討中です。

また認知症対策として、今年4月に認知症早期支援チームが市内4施設で発足し活動を始めています。地域ケア会議では昨年度認知症パンフレットを作成し、高齢者支援センターや小地域ケア会議等で活動している地区の団体に利用して頂いているところです。評判はととても良好で、集会や戸別訪問の時に是非使いたいとの要望を頂きますが、残念ながら十分な予算がとれず思うように配布できていないのが実情です。そこで今年度は岡山県が企画を募っていた“認知症ケアに係る医療連携体制整備事業”に申請し受理されました。認知症ケアパスとして、このパンフレットを対象世帯全戸へ配布することを目指し、さらに講演会や症例検討会、グループワーク等でこれを利用し連携を深めて行くつもりです。また、地域でキーとなり得る施設(理・美容室、スーパー、コンビニ、銀行など)においても認知症への理解を深めてもらい、気になる高齢者の情報を高齢者支援センターに集約するシステムを構築したいと考えています。

その他、小地域ケア会議で希望が多いサロン活動について、今年4月に倉敷市に新設された生活支援コーディネーターと一緒に地域の実情を調査し、そのニーズを見極め、更に活動が活発になるように支援していきたいと考えています。

最近、様々な会議や活動に参加するようになり、医療、行政、介護、地区の各団体等と一緒に連携して行こうという気概をひしひしと感じられるようになりました。つい数年前までは、外来に来る患者さんの話を聞き、薬を処方することで地域医療をひ

とりでやった気になっていましたが、私の知らないところでこんなに多くの人（薬剤師、訪看、ケアマネ、ヘルパー、施設職員、民生・愛育・栄養委員、社協、老人会、自治会、コミュニティー、近所の人等）に支えられてやっと生活が成り立っているたくさんの患者さんがいることを実感させられました。行政職と話し合うことで勉強になることはたくさんありますが、何より他職種の若者達+ a と本音で話し合えることが一番うれしいことと感じています。Facebookで友達申請も多く来るし、飲み会にも誘われるようになりました。若い人達が頑張っている姿を見るにつけ何か応援したくなります。そこには損得感情は働きません。

2025～2040年の問題が取り沙汰されますが、それを乗り切るには、医療・介護などの専門職が効率よく連携することはもちろん必要ですが、それだけではなく、地域の住民をも巻き込んで地域全体が一つの病院のように有機的に繋がり、同じ情報を共有し、同じ方向を向くことこそが地域包括ケアシステムの真髄ではないかと考えます。

今年度、地域ケア会議では“住み続けたい 心ふれあうまち 暮らしき”というキャッチフレーズを作りました。この言葉通りの街になるように頑張りたいと思います。



御津医師会：山中慶人